

2020年 3月13日

非血縁者間 末梢血幹細胞採取認定施設

採取責任医師 各 位

(公財)日本骨髄バンク 医療委員会

ドナー安全委員会

末梢血幹細胞採取バッグの輸血セットを接続する部位(スパイクポート)に
検体採取のための操作アダプターが接続されていた事例について

拝啓

日頃より骨髄バンク事業にご理解、ご協力いただき誠にありがとうございます。

末梢血幹細胞採取時に、輸注用の輸血セットを接続する部位(スパイクポート)にCD34測定用検体採取のため、操作アダプターが接続されたまま移植施設へバッグが届いた事例が報告されました。

採取施設へ状況を確認したところ、採取機器変更に伴うバッグ形態の確認不足で生じた事例でした(別紙参照)が、再発防止の観点から情報提供をいたします。

また、各先生方におかれましては日頃より十分にご配慮いただいていると存じますが、製剤サンプリングを採取する場合には、採取バッグの「サンプルバルブ」から採取することをあらためて院内でもご周知くださいますようお願い申し上げます。

敬具

(別紙)

以下は移植施設からの報告と採取施設への確認事項です。

<移植施設からの報告>

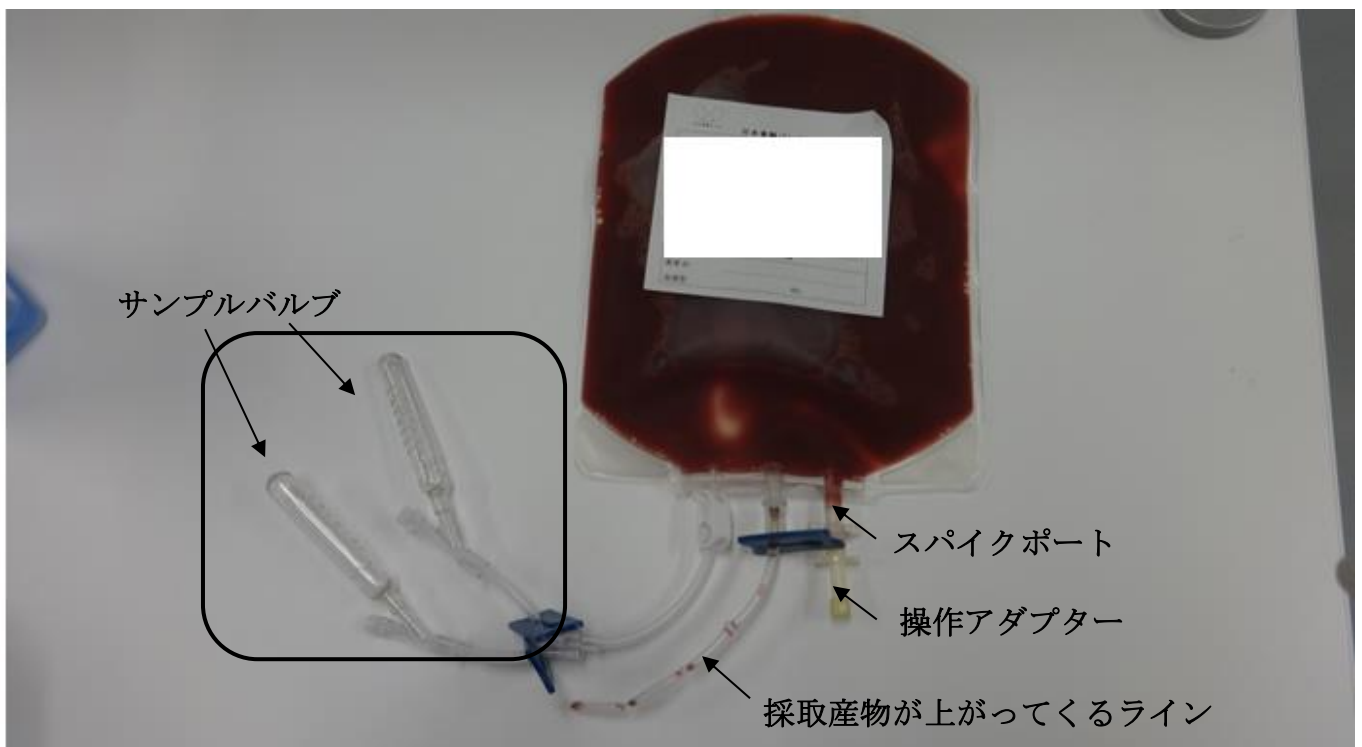
1. 経過

末梢血幹細胞採取バッグの輸注用の輸血セットを接続するべきところに、採取施設で検体採取（おそらくCD34測定用）のための操作アダプターが接続されていた。

2. 対応

操作アダプターを抜いて輸血セットを接続するのは、破損、漏出などのリスクがあると判断し、接続された操作アダプターから注射器で採取産物を吸引し、カワスミのバッグに入れ替え輸注を行った。

(写真)



<採取施設への確認事項>

○施設内で血縁者間移植を実施する際にも同様の操作を行っているのか。

血縁末梢血幹細胞採取ではいつもこのようにしているが、ほぼ全例で凍結している。

もともとフレゼニウス社の採取機械を使用していたが、テルモのOptiaに変わったことで、バッグも変更になっていた。以前使用していたものは2つ差し込み口がついていたので、操作アダプターを接続しても、輸血セットの接続が可能であった。現在のバッグは一つしか差し込み口がついていないことに気が付かなかったのが原因と思われる。バンクの末梢幹細胞採取も機械が変更になってから初めてだった。

以上